

ごあいさつ

北海道教育大学附属旭川中学校
校長 川邊 淳子

日頃より、本校の教育・研究に関しまして、ご理解・ご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。

約10年ごとに改訂されます学習指導要領に関して、2024年12月に文部科学相が中央教育審議会に諮問されました。2025年の年明けから中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会で2025年9月まで13回議論がなされ、論点整理が提示されました。それによると、次期学習指導要領に向けた今後の検討の基盤となる基本的な考え方として、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手を「みんな」で育むため、①「主体的・対話的で深い学び」の実装 (Excellence)、②多様性の包摂 (Equity)、③実現可能性の確保 (Feasibility)の3つの方向性を踏まえて議論を行うとし、これらの3つの方向性に基づく改善は、教育課程内外のあらゆる方策を用いつつ、三位一体で具現化されるべきものであるとしています。①「主体的・対話的で深い学び」の実装は、現行学習指導要領が目指している、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通じた資質・能力の育成について、一層の具現化・深化を図るものです。②多様性の包摂は、多様な個性や特性、背景を有する子供が多くなっている実態に向き合うとともに、こうした多様性を個人及び社会の力に変える観点から、一人一人の意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指すものです。③実現可能性の確保は、第一・第二の方向性の両立を支え、実現可能とする観点であり、デジタル学習基盤の更なる充実、教科書や教材、指導書の改善、必要な設備の整備、総合的な勤務環境整備とも相まって審議全体に通底させるべき第三の方向性です。こうした3つの方向性を現時点で端的に表現すれば、「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものに」と言え、第一の方向性は「深い学び」、第二の方向性は「多様な子供たち」、第三の方向性は「確かなもの」という言葉に主に託されているとされています。2030年度に導入予定である小・中・高等学校の次期学習指導要領に向けて、今は大きな教育の転換期に差し掛かっております。

限られた授業時間の中で、何を学ぶのか内容の議論はもちろんのこと、予測困難な社会において、多様な価値観の中で生きていく子どもたちの育成においては、どのような環境に置かれたとしても、自らが主体的に学ぶ方法を学ぶことが何よりも重要であると思われれます。文科省の教育課程課長の武藤久慶氏は「子供たちが自らの人生をかじ取りする力を身に付けられるよう、デジタルの力でリアルな学びを支えつつ、多様性を包摂できる次期学習指導要領を目指したい」と言っています。

本年度の研究テーマは「仲間との協働を通して個を磨く生徒の育成～学びのセルフ・マネジメントの工夫～」の2年次にあたります。1年次研究では「学びのセルフ・マネジメント」を軸として、教師の適切なファシリテートにより、生徒の「個別最適な学び」をさらにアップデートさせた実践を行ってきました。2年次研究では「協働」の本質に迫り、多様性・共有ビジョン・協働の軸に着目することで「協働的な学び」を創出してきました。3期に分けて来校型とオンライン型のハイブリットで公開研究会を行い、全教員が授業公開を行いました。共同研究者や助言者の皆様、ご参加・ご視聴くださいました皆様に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

本紀要につきましても、忌憚ないご示唆をいただけましたら幸いです。